



チリメンモンスターとは？

ちりめんじゃこの原料となるカタクチイワシの稚魚（シラス）を漁獲する際に、さまざまな魚の稚魚やイカ、タコ、カニなどの幼生が混獲されます。これらの混獲物を、ちりめんじゃこに混じるモンスターに見立てて、「チリメンモンスター（略称：チリモン）」と呼んでいます（図 1-10）。

チリメンモンスターは、ちりめんじゃこに加工される過程で、機械や人の手によりその多くが除去、廃棄されます。そのため、実習では無選別のもや選別した混獲物をもう一度混ぜ合わせたものを使っています。



図 1-10 チリめんじゃこに混じるチリメンモンスター（2016 年 4～5 月 大阪・和歌山・神戸産）

● チリメンモンスターの特徴

ちりめんじゃこが漁獲された海にすむすべての生き物がチリメンモンスターとして見つかるわけではありません（図 1-11）。カタクチイワシの稚魚をはじめとする、海にすむ生き物の多くは、卵からふ化して一定の期間、海中を漂って生活する浮遊幼生期を持ちます。チリメンモンスターに見られる生き物の多くは、この浮遊幼生期に漁獲されたものです。そのため、生まれたときから海底で生活する生き物や、浮遊

幼生期を持つものの、船びき網が操業していないような沖合にすむ生き物はチリメンモンスターには登場しません。

さらに船びき網漁では、泳ぐ力の強い大型の生き物は手前の粗い網の目から逃げるのができ、逆にサイズのとても小さなプランクトンなどは末端の網から抜け出すことができるので、どちらもカタクチイワシの稚魚とは一緒に漁獲されない仕組みになっています。

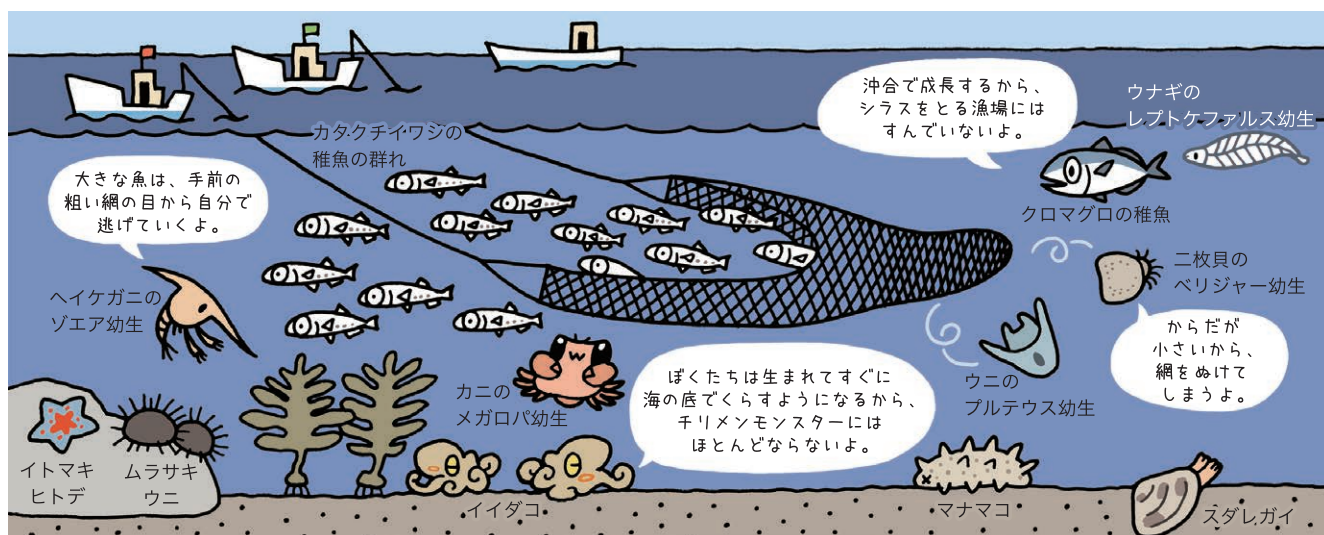


図 1-11 チリメンモンスターとして見つからない生き物

● チリメンモンスターの季節性

チリメンモンスターとして見つかる生き物は、カタクチイワシが獲れた時期により大きく異なります（図 1-12）。

海の生き物が卵を産む時期はさまざまで、稚魚や幼生の餌となる動植物プランクトンが増加する春から初夏に行う種もいれば、競争相手や捕食者が少ないとされる冬季に卵を産む種もいます。

チリメンモンスターに見られる生き物たちは、卵からふ化してから間もない稚魚や幼生が多いので、それらが見つかる時期も、その生き物の卵を産む時期と関係して変わってくるのです。もちろん、中には生まれてから死ぬまで浮遊生活をして過ごす種類もあり、そういった生き物にほとんど季節性は見られません。

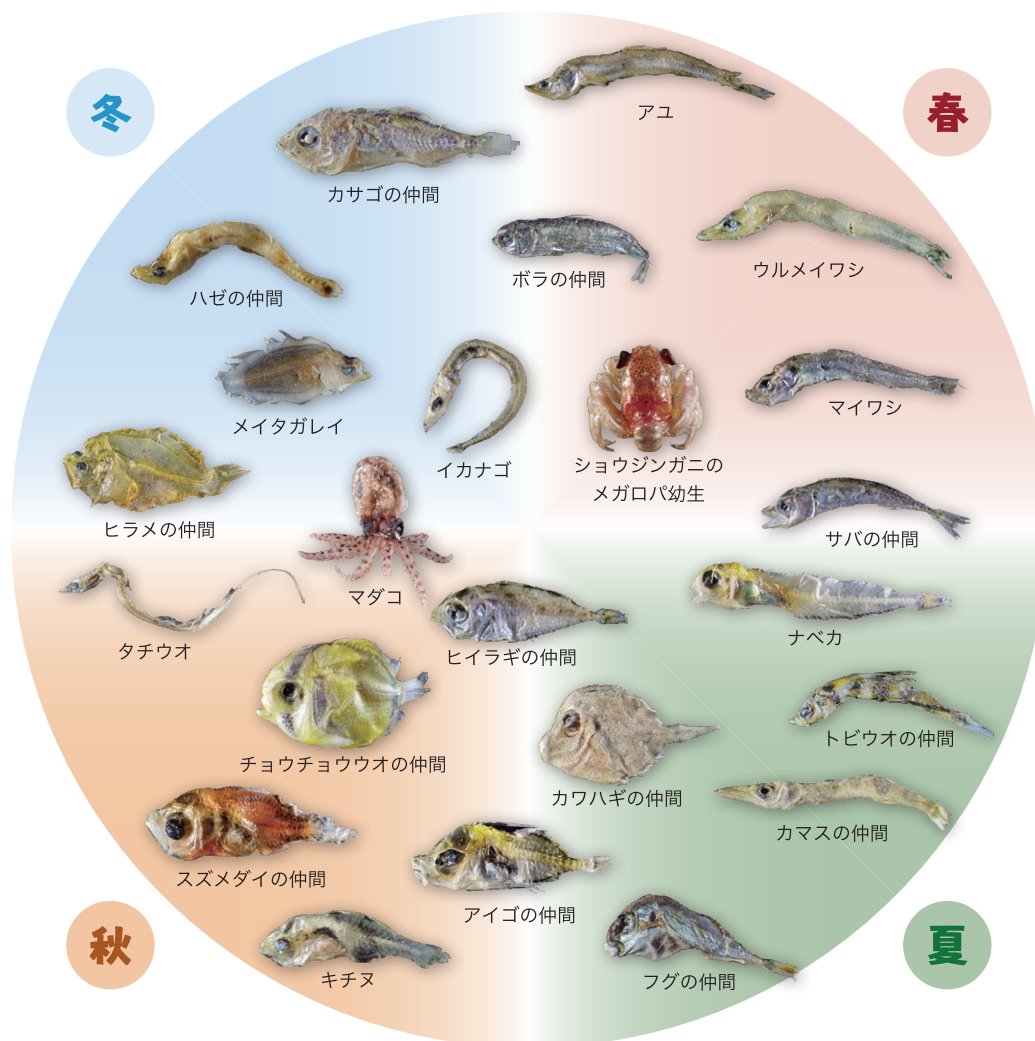


図 1-12 チリメンモンスターに見られる生き物の季節性（大阪湾の例）

● チリメンモンスターの地域性

日本は周囲を海に囲われた島国ですが、南北に細長い形をしていることもあり、亜熱帯から亜寒帯まで多様な気候区分があります。このような気候の違いは、生息する生き物の種構成にも影響します。これはチリメンモンスターの世界でも同じで、ちりめんじゃこをとる地域が異なると見つかる種類にも違いが見られます（図 1-13）。

気候以外にも、底質環境（磯、砂泥、藻場、サンゴ礁など）や水深、水質のほか、漁法や漁具によってもとれる生き物たちは変わります。ひとことで地域性といっても、その違いをもたらす要因はさまざまです。

図 1-13 大阪湾産チリメンモンスターにほとんど見られない生き物たち

